博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	片岡　龍
論　文　題　目	16 世紀後半から 19 世紀はじめの朝鮮・日本・琉球における＜朱子学＞遷移の諸相

審査要旨

本論文は、生態学の用語である遷移、極相という概念を利用しながら、朱子学の東アジアにおける展開とそれが引き起こす諸相を捉えようとしたものである。かかる概念を使用するのは、単なる文化の受容、変容というような従来の単線的な捉え方から脱皮して、伝統思考と外来文明の相互作用をより動態的かつ複合的に把握しようとするからである。著者は朱子学を文明事象、陽明学、古学を文化借用として捉え、朱子学が朝鮮、琉球、日本、ベトナムで文化借用されながら、遷移していき、それぞれの極相に到ったと見る。

まず朱子学遷移の純粋な兆候が見えたものとして朝鮮の李退渓を取り上げる。李退渓は心の修養を重視したが、その理論の形成過程を解明する上で医学が大きな役割を果たしていたという見解を著者は提出し、李退渓は自分の心病の自覚に明の朱権『活人心方』への関心が作用していたこと、その克服のために彼が湧泉穴の摩擦方などの医学の知識を深めたことなどを具体的に指摘する。また「心は神明の舎」観についての李退渓と交渉のあった盧守慎との対比、当時の朝鮮で中国の最新の医学書や養生書の受容についても検討も行う。他にも李退渓の心の思想は徐敬徳の気の哲学を批判的に継承している面もあること、李退渓が人心と道心の関係を体用的にではなく妙凝として捉える方向の結節点に位置すること、それが医学の心臓における「血肉の心」と「神明の心」の区別が関わっていることを指摘する。李退渓が理に能動性を見、そこから四七論弁が起こったことは知られているが、著者はそれを理解するために、イグナティウス・デ・ロヨラの「霊動弁別」と対照させ、そこに一種の共時（意味のある偶然の一致）現象を見出す。

次に著者は、文明遷移の展開様相の一例として、張旅軒（顕光）の公共観を検討する。著者は、旅軒における「公共」に朝鮮的要素と旅軒の個人的要素が見出されること、旅軒には生命論的広がりがあることを言う。更に李退渓門下の鄭惟一、李徳弘、曺好益における「公共」の検討から、性を公共に高めようとする着手点として心身（気）への注目があることを言う。また士林の分裂や壬辰倭乱の混迷の影響から柳成龍や旅軒において「公共」が社会次元に伸びていることを指摘する。

日本における朱子学の遷移に関しては、著者は、日本では朱子学が普及する前に西洋科学とキリスト教の一定程度の浸透があったとし、戦国末期、江戸初期における儒教、キリスト教、当時力を持った天道思想の天についての見方の異同について考察する。著者は林羅山の議論の検討から、天、天道とキリスト教のデウスとの相違点が自然か超越者かという点にあるとし、後者の場合は、超越者から垂直に下降する方向性となり人間は受動的になるとする。またそれに先だって藤原惺窩はその受動を能動に転化させ、また社会秩序の安定を求めたが、心の問題に収斂させることでそれを行ったことなどを指摘する。中江藤樹の思想については、大乙神と朱子学の緊張関係を見、前者が後者よりも勝っていることを言う。藤樹においては大乙神を頂点とする神理が宇宙の隅々まで行き渡っていて、藤樹が強調する禍福応報もその中に位置づけられていると見る。そのうえで著者は、このような藤樹の思想の性格をキリスト教的とし、藤樹が排除しようとした格套もキリスト教的要素によるのではないかとする。

もともと文明事象としての朱子学には心性中心の方向と、経世中心の方向があり、両者は関係しあっていたと著者は見る。そして当初は心性中心であったものが、１７世紀後半ごろから経世的志向が目立ってくるとし、その中で登場したのが仁斎の思想であるとする。著者は、仁斎は心性を切り落として経世に進んだのではなく、心性に経世を取り込んだとし、それが彼の「人道」であり、取り込まれた経世が「王道」であり、経世から分離した外在せる道が「天道」であるという見解を提示する。更に仁斎に朱子学の遷移の極相を見、徂徠にはその極相からの一つの展開を見る。徂徠についても、朱子学が天を知るという方向を持つのに対して、徂徠にあっては天が人に天命をくだすという方向に旋回していることを指摘する。つまり天が王や士大夫に命をくだし、王や士大夫は民に仁を降すという直線的方向性があると見るのである。更に徂徠の天命説が５０歳ごろに政治的地位を得られないことから道の実現をあきらめ、文によって自己の使命を果たす方向

氏名 片岡 龍

に転回したとし、徂徠の天命説の背後には古文辞が読書以上に修辞に意義があるという考えがあり、その修辞によって目に見えない世界（道の創造性）と一体化するという方法的自覚の成立があったとする。

著者は、朱子学の遷移が、気の次元（社会環境）の変化に応じて「心」と「天」（自然環境）の関係が再定位されるとし、１８世紀になると「心」と「天」の間に活物世界として実在する社会環境そのものへの関心（経世）が前面に出てくるとし、その視点から琉球の蔡温の思想を分析する。蔡温が「天」を言語によって説くことのできない根源的生命力を意味するものと解釈していること、天と人の間の齟齬を来す原因となる「惑い」が気の相剋や相反から起こるとし、それを克服するものとして「天性の霊光」としての「真知」を考え、それを求め続けることを要求していることなどを指摘したうえで、このような考え方の中に心学と実学の独自の連結があり、「虚（霊）」でありながら「実」であるという朱子学の理が「霊動」的な性格を強めていると見る。なお著者はここで実学概念の再検証を試みている。

著者は最後に、幕末の大田錦城と同時代の朝鮮王朝の丁茶山を比較し、両者には生命と霊性についての類似の議論があることに注目する。茶山がキリスト教との接触が明確にあるのに対し、錦城にはその確証と言えるものはないが、両者とも聖人を預言・予知能力を持ったシャーマン的存在とし、実学的イメージと異質な運命観を共有していたとする。また両者の仁についての見方も比較し、道徳的実践とすることでの共通点と、善悪認識における差を指摘する。更に錦城の知天説は、智によっては知りえない生命の連続とそれを左右する神霊の働きに対して歴史的・経験的事実の集積を通して法則を導き出し、それを活用して天地の造化に積極的に働きかける方向性を持っているのに対し、茶山は事天という語の使用に現れているように、天を仕える対象として人格的に捉えているとする。そして茶山における知天とは天が人の善悪を監視していることを知ることであり、それを知ることが自己修養の根拠とされていること、生命と霊性には重なることがあるが、生命は本質的に善なる存在であり、内部感覚的に捉えられるのに対し、霊性は固体を超えて働き、複数が出会う場に善悪をもたらすという構造を剔抉する。またあわせて１９世紀になると、文明事象としての理が持つ「霊／実」構造が次第に分離していった可能性も指摘する。

文明事象としての朱子学を軸にしながら朝鮮、日本、琉球を総括的対比的に描き、文明遷移の諸相を描いた本論文は、この報告書要旨に書ききれないほど多くの新たな見解に溢れている。その中で李退渓の思想形成と医学書、養生書との関係の指摘、荻生徂徠の天命観の構造分析、実学の面が強調される蔡温や考証学者・折衷学者で済まされる大田錦城の思想的個性の摘出などは特に意義あるものであろう。大田錦城と実学者丁茶山の聖人、道徳、天についての議論の対比も斬新である。

著者の議論は極めて大胆であり、特に日本の近世初頭のキリスト教の影響が果たして著者の言うほど大きいものであったについては異論も出よう。また藤樹の思考にキリスト教的なものをそのまま認めてよいのか、仁斎の思想にどこまで経世的要素を認められるのかも議論を呼ぼう。特に著者の方法論が空間的な次元にはよく対応しているが、時間的な展開に関しては更に説得力のある議論が必要であり、今後取り上げる対象を増やして方法論の精度をあげることが求められよう。しかし本論文が近年のこの分野の一つの達成であり、ここでなされているいくつもの指摘が現在の研究状況を強く刺激するものであることは確かである。

以上から、本論文が博士学位授与にふさわしいと判断する。

公開審査会開催日	2018 年 6 月 18 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	土田 健次郎	中国近世思想・日本近世思想	博士（早稲田大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	森 由利亜	中国近世宗教思想	
審査委員	恵泉女学園大学・名誉教授	澤井 啓一	日本近世思想・朝鮮近世思想	